

～TANKYU～

谷地南部小学校
校内研究だより
2023. 2. 6
No.56 文責 荒木秀

どう話し合うか①

先日の伊藤先生の学年通信（71号）より

2月1日の1時間目に、お楽しみ会を行いました。実は、2学期のうちから計画を始めていた企画です。子ども達から、「お楽しみ会をしたいです。」という声上がり、発起人の子ども達が中心になって他の児童に「やるか？やらないか？」から話し合いを始めました。最初の子どもの反応は・・・やりたくない児童が5～6人いました。多数決的な考えでいけば実施決定ですが、否定的な意見の児童が複数います。少数意見をないがしろにして進めるわけにはいきません。私が「やりたくない人がいるから、このままじゃできないなあ。」と言うと、子ども達は説得を始めました。反対派の児童の言い分は、こうです。「ルールを守らない人がいる」「やった後に、泣く人が出る」確かに、これでは「お楽しみ」会ではありません。（続く）

印刷室の通信を読んで、思わず「それなっ！」（こういう遣い方で合ってます？強い同意的な…？）と思いました。「話し合い」って難しいですね。特に最近は「多様性」や「マイノリティ」が尊重され（それ自体に全く異論はありません。みんなが尊重されることは大歓迎です。）、多数決で決定しにくくなってきたなと感じています。でも、クラスで1つに決めなければいけない場面はあるわけで…。みなさんは、こんなときどうされますか？

そんな課題意識から最近読んだ本を紹介します。『「対話と決断」で成果を生む 話し合いの作法』（中原淳）

「はじめに」の中の一節です。

あなたは「話し合い」を学んだことはありますか？

そもそも、話し合いの作法について学んだことのある人はいるのでしょうか。（中略）読者の現場の先生方の中には、「いや、そんなものは、すでに既存の教育課程で教えているよ」とおっしゃる方もいらっしゃるかもしれません。（中略）しかし、私たちの身近で起こっている「話し合い」は、本当に成立しているのでしょうか？誰もが意見を持ち寄り、それらが受容され、納得感をもって、物事が決められているのでしょうか？

いやー、身につまされますねえ。詳しくは次号で。

